

明治・大正期における外来語略語の形成— 単語型略語を中心に —

On the Word Formation of Japanese Loanword Abbreviations in the
Meiji and Taisho Periods : Focusing on the Simple Word Type

余 澤 涛

SHE, Zetao

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第48号 2019年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.48 2019

明治・大正期における外来語略語の形成

—単語型略語を中心に—

余 澤 涛*

1. はじめに

外来語（漢語を除く）が略語化され、外来語略語が大量に造られたのは明治・大正期以降のことである。本稿はこの時期において外来語がどのように略語化されたことを考察するものである。

明治期より前の江戸期において、外来語略語が存在することが確認できる。例えば、大久保忠国・木下和子編『江戸語辞典』（東京堂、1991）を調査した結果、＜蘭語 grof grein＞から由来する「ごろふくりん（呉紹服連）」がある。同辞書の記述によって、この語は「ごろふく」、「ごろ」、「ふくりん」に略される。しかし、この時期において、このような語例はまだかなり少ない。そのため、外来語略語が盛んに造られたのは明治期以降のことであると言えよう。

本稿は一語で構成される外来語（「セメント」の類）を単語型外来語とし、二つ以上の語が構成する外来語（「ガイド・ブック」の類）を複合語型外来語とする。単語型外来語が略語化して形成したものを「単語型略語」と呼び、複合語型外来語の略語を「複合語型略語」と呼ぶことにする^{注1}。紙幅の制限により、本稿の考察は単語型略語に限り、同時期の複合語型略語についての考察は別稿に譲りたい。

また、略語化において、原語の一部を保留して略語を造ることが普通である。例えば、「セメント」は「セメン」に略される。このような、短縮による外来語の略語化を明らかにするのが本稿の主な目的である。一方、原語の持たない要素を持つ略語も存在する。例として、略語「ロール」と原語「ローラー」が挙げられる。このような語例を「不規則型」の略語と呼ぶことにし、それについても説明を加える。

記述を簡潔するため、いくつかの記号を使用する。単語型外来語の中で、接辞を持つ語例が存在し、接辞が略語化に影響を与えることがある。そのため、「#」で語基と接辞の切れ目を示す（「キロ#グラム」の類）。略語の語例を「セメント」のように書く。大文字の部分は略語形である。外来語の略語化を「セメント→セメン」のように「→」で表す。音節を「σ」とし、モーラを「μ」とする。

*シャ タクトウ 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程。

^{注1} 外来語略語の分類について先行研究の田辺（1988）が挙げられる。同論文は外来語略語を単語型と複合語型に分ける。単語型の語例は前省略型、中省略型、後省略型があり、複合語型の語例は前省略型、中省略型、後省略型、前後省略型、頭文字型がある。

2. 先行研究

Itô (1990) は外来語略語の音韻構造を指摘しており、外来語の短縮に制限を与える音韻規則を述べた。

窪 蘭 (2010) は5モーラ以上の長さを持つ外来語が形態的に単純語であっても音韻的に複合語であると述べ、その短縮について「分節説」を提示した。

太田 (2014) は「音韻的な基準制約は実はあまり重要ではない」と述べ、語彙競争の観点から、人々が略語を見たらその意味を理解し元の語を思い出せるかどうかが重要であると指摘した。

以上の先行研究はいずれも外来語の略語がどのように形成したかという問題を取り組み、明らかにすることを試みた。Itô (1990) と窪 蘭 (2010) は音韻的な視点から分析を行い、太田 (2014) は語彙的な視点から分析を行っている。

本稿は諸先行研究の結論を踏まえ、外来語略語の形成を音韻の視点だけではなく、語構成や語の意味などの語彙的視点から論じたものである。

3. 辞書調査について

3.1. 辞書の選定

外来語略語の語例は明治・大正期の外来語辞書、新語辞書、流行語辞書、国語辞書などから収集した。できるだけ多くの辞書を調査し、語例を網羅した。調査した辞書は以下のようである。

①大槻文彦編『言海』(大槻文彦、1889～1891)、1110ページ:沖森卓也編『図説 日本の辞書』(おうふう、2008)によると、『言海』は「五十音図順で並べられた初の本格的な国語辞典。(中略)1889(明治22)年から1891年にかけて私費で4分冊にして刊行された。(中略)巻末にある「言海収録語…類別表」によれば39103語を収録する」。この辞書は漢語、和語以外に、当時の外来語も収録している。

②山田美妙著『日本大辞書 全第六版』(明法堂、1893)、1399ページ:『図説 日本の辞書』によると、山田美妙著『日本大辞書』は「各語にアクセントをつけたものとしては最初の辞書。(中略)『言海』への対抗意識で編集が始められ、1400ページからなる大著として刊行された」ものである。この辞書は漢語、和語、外来語を収録しており、専門語も収録している。

③棚橋一郎・鈴木誠一著『日用舶来語便覧』(光玉館、1912)、190ページ:曾根 (1994)によると、『日用舶来語便覧』は1912年に出版されて、「明治最後の年に日本で最初に出た外来語辞典の一つとして知られる」。この辞書は明治期の外来語を収録している。

④勝屋英造編『外来語辞典』(二松堂書店、1914)、408ページ^{注2}:冒頭にある「凡例七則」は「収

^{注2} 『外来語辞典』の最後の約100ページは「附・新語及神話小解」というものである。そのため、『外来語辞典』は外来語を収録する部分が約300ページである。本稿が言う辞書のページ数はすべて辞書の附録を含まないものである。

む所の語七千、中には全然ジャパナイズ（日本化）されたるものもあれども、未だ全く日本化されざるものも少からず、哲學、科學、政治、法律、經濟、宗教、文藝各方面に亘る學術語、専門語、新聞雑誌に散見する片假名即ち外國語、或は社交界に於て使用せらるゝ外國語學生間に使用せらるゝ外國語、實業界に於て使用せらるゝ外國語、運動及び遊戲上に使用せらるゝ外國語」と述べている。

- ⑤時代研究会編『現代新語辞典』（耕文堂、1919）、284ページ：「例言」によると、収録している語は「最近に於ける新聞、雑誌、小説、論文、演説、講演及び日常の對話、會話中に使用せらるゝ新熟語、新術語、新意語、流行語、外國語等」というものである。
- ⑥上田景二編『模範新語通語大辞典』（松本商会出版部、1919）、365ページ：外来語を含む当時の新語、流行語を収録している。
- ⑦小林鷲里編『現代日用新語辞典』（文芸通信社、1920）、363ページ：序によると、辞書は「自國語と外來語、若くは俗語、藝術語、科學語、哲學語、神話、傳説などを打して一丸として編纂する（中略）新しい言葉もあれば古い言葉もある」。
- ⑧自笑軒主人著『秘密辞典』（千代田出版部、1920）、394ページ：例言には「此の書に収めたる詞は、他の普通の辞書などには、無いものが多いと思ひます。本書に収むる處は、隱語、略辭、謎、俚諺、地口、洒落、俗説、符牒、記號、外來語、新流行語、特殊階級語、方言などです」という記載がある。
- ⑨小林花眠編著『新しき用語の泉』（帝国実業学会、1922）、1370ページ：序によると、辞書の語例は「文學・美術・哲学・法律・經濟等の語より、慣用の俗語・通語・外來語・新時代語等をも含んでゐる」。そして、「外國語の部にも既に十分日本化（ジャパナイズ）されて、日本流の發音をしてゐるものもあり、未だ更に日本化されない新しい輸入語も数多く採録してゐる」。
- ⑩紅玉堂編輯部編『活用現代新語辞典』（紅玉堂書店、1924）、204ページ：当時の新語を収録している。
- ⑪素人社編『現代語辞典』（素人社、1924）、310ページ：序によると、辞書は「現代に於て最も活用されつゝある語を、出來得る限り廣い範圍から聚集し、それに平易且つ適確な説明を施したもので、在來のものより一頭地をぬいてゐることを、ひそかに自負してゐるものであります」。
- ⑫秋山湖風・太田柏露編『最新現代用語辞典 大正14年版』（明光社、1925）、317ページ：序には「本書はこの新時代に處して最も必要なる又は最も廣く使はれる外來語、俗語、隱語、新造語、思想界用語、科學用語、哲學用語、法律用語、美術用語、運動界用語、新聞用語、劇場用語等苟も現代生活に關係ある新しい言葉は出來る丈廣く蒐集網羅して置いた」と書いてある。
- ⑬服部嘉香・植原路郎著『新しい言葉の字引 大增補改版』（実業之日本社、1925）、795ページ：序はこの辞典を外來語辞典、俗語辞典、通語辞典、文學辞典、哲學語辞典、新時代語辞典として使えると述べている。

⑭上田由太郎『英語から生れた新しい現代語辞典』（駿々堂出版部、1925）、420ページ：冒頭の「例言」によると、この辞典は「最近に於ける新聞、雑誌、書籍及び日常對話、會話中に使用せらるる新熟語、新術語、流行語、外國語等を蒐集採録し、これに平易簡明な解釋を加へたものである」。

⑮新語研究会編『新らしい言葉は何でもわかる』（ヤナセ書院、1926）、423ページ：序に書いているように、辞書が収録しているのは「現時一般に於ける新聞、雑誌、小説、論文、演説、講演及び日常對話に使用せらるゝ新熟語、新意語、流行語、外國語等」がある。

3.2. 略語の認定

略語であるかどうかを認定する基準は辞書の解釈による。「(…は) …の略語」や「(…) は単に…とも言う」のように明確な記載がある語例を略語であると認定した。

- ・ノート…手控、書附Note（英）記號標註註釋等、ノートの略言。又紙幣の事にも用ふ。
- ・フロックコート…普通禮式洋服Frock-coat（英）洋服の中上衣の長さ仕立にして普通禮服なり單にFrock（フロック）とも云ふ。

以上の「ノート」と「フロックコート」の解釈は③『日用舶来語便覧』から引用したものである（波線は筆者によるもの）。このような記載は明確であり、このように記載される語例は略語と認定した。

4. 単語型略語の語例

4.1. 語例のまとめ

15冊の辞書から収集した語例をまとめると、表1のようである。

表で挙げられた語例は形態的に、主に二種類に分けられる。一つは前の部分を保留し、後部を省

表1 単語型略語の語例

①『言海』	前部保留型：ペロ _リ ン 後部保留型：フラン _ネ ル
②『日本大辞書 全第六版』	前部保留型：セメン _{シイナ} ^{注3} セメント ブラン _{テイ} 後部保留型：フラン _{ケツト} フラン _ネ ル
③『日用舶来語便覧』	前部保留型：エッキス _{トラクタム} カリ _{ウム} コスメ _{チック} コンクリート セルジ セメン _{シイナ} ダイヤ _{モント} プロ _{ステイテュート} バラスト ブラン _{テイ} モス _{リン} メモ（memorandumの略） 後部保留型：コス _{メチック} ワニス フラン _ネ ル 不規則型：エレクトリシチー→エレキ ブラン _{ケツト} →ケツトー ハンカチーフ→ハンケチ メッセル→メス

注3 ②『日本語大辞書』、⑦『現代日用新語辞典』、⑧『秘密辞典』は外来語であるのに関わらず、平仮名で見出し語を表記しているが、表記を統一するため、本稿の外来語語例をすべてカタカナで表記する。

④『外来語辞典』	<p>前部保留型：アド(advertisement又はadvertisingの略) エレキ^{テル} キロ^{グラム} コレス^{ボンダンス} セメント セメン^{シナ} セル^ジ ダイヤ^{モンド} チャン^{ピオン} ブラン^{デー} プロ^{ステイテュート} ミリ^{メートル} メモ^{ランダム} ロガリ^{ズム} レザ^ー レット 後部保留型：コス^{メチツク} フラン^{ネル} プラン^{ケット} ヲニス 不規則型：ハズ^{バンド}→ハス グリ^{セリン}→リス^{リン} ロー^{ラー}→ロー^ル メツ^{セル}→メ^ス</p>
⑤『現代新語辞典』	<p>前部保留型：エキ^ス トラク^ト エレキ^{テル} セル^ジ ダイヤ^{モンド} 後部保留型：フラン^{ネル}</p>
⑥『模範新語通語大辞典』	<p>前部保留型：エキ^ス (extractの略) ポリ^ス マント^ル ハズ^{バンド} メモ^{ランダム}</p>
⑦『現代日用新語辞典』	<p>前部保留型：アルミ^{ニウム} エキ^ス (extractの略) セル^ジ ダイヤ^{グラム} メモ (memorandumの略) 後部保留型：ヲニス</p>
⑧『秘密辞典』	<p>前部保留型：イン^{スト} (instantの略) エン^{ゲー}チ^{メント} エス^{ケー}ブ キロ^{グラム} コン^{キユウ}バイン^{ゴシツク} コン^{パニ}ー セル^チ セメン^ト チヤン^{ピオン} トロ^{ッコ} ハス^{バンド} ハン^{カチ}ーフ ピツ^{チャー} フラス^コ ファン (fanaticの略) ブラン^{デー} プロ^{スチユート} メモ (memorandumの略) モス^{リン} ランド^{セル} 後部保留型：コス^{メチツク} フラン^{ネル} 不規則型：キユ^{ピット}→キユ^{ピー} ロー^{ラー}→ロー^ル</p>
⑨『新しき用語の泉』	<p>前部保留型：アド (advertisementの略) イン^バネ^ス エレキ^{テル} キロ^{グラム} サル^{ヴァル}サン^{シスター} ジヤ^ツブ (japaneseの略) セル^ジ セメン^{シナ} パン^ク チュ^ア プロ^{ステイテュート} メモ^{ランダム} ロガリ^{ズム} 後部保留型：ヲニス 不規則型：グリ^{セリン}→リス^{リン} ダイ^アグラム→ダイ^ア ダイ^アモンド→ダイ^ア ロー^{ラー}→ロー^ル</p>
⑩『活用現代新語辞典』	<p>前部保留型：アス^パラ^{ガス} イン^バネ^ス エス^{ケー}ブ エレキ^{テル} シス^{ター} ダイ^アモンド ダイ^アグラム ブル^ジョ^ア プロ^{ステ}チ^{ユート} プロ^{レタ}リア^{ート} プロ^{グラム} ポリ^ス ミス^テーク メモ^{ランダム} 後部保留型：アルミ^{ニウム} その他：モル^ヒネ 不規則型：ゴシ^{ツク}→ゴ^チ</p>
⑪『現代語辞典』	<p>前部保留型：アス^パラ^{ガス} エス^{ケー}ブ エレキ^{テル} シス^{ター} ダイ^アモンド ブル^ジョ^ア プロ^{ステ}テ^{ュート} プロ^{レタ}リア^{ート} ポリ^ス ミス^テーク メモ^{ランダム} 後部保留型：アルミ^{ニウム} その他：モル^ヒネ</p>
⑫『最新現代用語辞典 大正14年版』	<p>前部保留型：エス^{ケー}ブ エレキ^{テル} コール^{タール} シス^{ター} ダイ^アグラム ダイ^アモンド パス (trespassの略) ブル^ジョ^ア プロ^{レタ}リア^ア プロ^{スチ}テ^{ユト} メモ (memorandumの略) その他：モル^ヒネ 不規則型：キユ^{ピット}→キユ^{ピー}</p>

<p>⑬『新しい言葉の字引 大増補版』</p>	<p>前部保留型：アド (advertisement、advertisingの略) インヴァ^{ネス} エスケープ エキス (extractの略) コールタ^{ール} シスタ^ー ジャツプ (japan、japaneseの略) ダイヤ^{グラム} ダイヤ^{モンド} チャン^{ピオン} ハス^{バンド} ビル^{ディング} プロ^{ステイテュート} プロ^{レタリアート} プロ^{グラム} マント^リ マント^ル メモ (memorandumの略) 後部保留型：タイ^{ピスト} コン^{ミッ} ショ^ン 不規則型：メツ^{サー}→メ^ス</p>
<p>⑭『英語から生れた新しい現代語辞典』</p>	<p>前部保留型：インバ^{ネス} エキス^{トラクト} エスケープ エボ^{ナイト} コールタ^{ール} シスタ^ー ジャツプ (japaneseの略) セル^ジ ブル^{ジョア} プロ (prostituteの略) モス^{リン} ポ^{プラ} 後部保留型：^ラニス 不規則型：ダイア^{グラム}→ダイヤ ロー^{ラー}→ロー^ル</p>
<p>⑮『新らしい言葉は何でもわかる』</p>	<p>前部保留型：インバ^{ネス} エキス^{トラストラクト} エスケープ エボ^{ナイト} シスタ^ー コールタ^{ール} ジャツプ (japaneseの略) シリン (cylinderの略) セル^ジ ダイヤ^{モンド} チャン^{ピオン} ブル^{ジョア} ポ^{プラ} ポ^{リス} モス^{リン} 後部保留型：アル^{ミニ} ユ^ム ^ラニス 不規則型：ダイア^{グラム}→ダイヤ ロー^{ラー}→ロー^ル</p>

略するタイプであり、これを単語型略語・前部保留型と呼ぶ。もう一つは前部を省略し、後部を保留するタイプであり、これを単語型略語・後部保留型と呼ぶことにする。

単語型外来語は一つの語で構成される。そのため、単語型外来語の略語化は前部を保留するか、後部を保留するかを選択することである。前部が保留される場合、形成したのは前部保留型の略語である。例えば、「ダイヤモンド」の略語化において、前部の「ダイヤ」が保留され、略語形になる。後部が保留される場合、形成したのは後部保留型の略語である。例えば、「フランネル」の略語化において、後部の「ネル」が保留され、略語形になる。

「モ^ルヒ^ネ」という前部保留型にも後部保留型にも属しない語例もある。この語は⑩『活用現代新語辞典』、⑪『現代語辞典』及び⑫『最新現代用語辞典 大正14年版』に収録されている。辞書調査を行う限り、「モ^ルヒ^ネ」のような省略パターンで造られた単語型略語はこれ以上見つからない。そのため、この略語を「その他」のグループに入れ、他の種類と区別する。

4.2. 不規則型の語例

語例の中で、不規則型の略語がある。本節では、その語例について説明を加える。

「エレクトリシチー→エレキ」は不規則型に見えるが、実はそうではないだろう。「エレキ」は「エレキテル」の略であると考えられる。『日用舶来語便覧』は「エレキテル」について「エレキテル…電氣Electricity (英) [エレクトリシチー] を読み誤りしなるべし」と説明している。「エレキテル」と「エレクトリシチー」が混同されたことがあったと考えられる。ということで、「エレキテル」

の略語としての「エレキ」は「エレクトリシチー」の略語であると同辞書に書かれている。

「ハンカチーフ→ハンケチ」について、池上（1970）が触れている。同論文によると、明治期において、＜英語 handkerchief＞は表記はかなりのゆれがあり、「ハンカチーフ」や「ハンケチーフ」などに表記されていた。池上（1970）は「ハンケチ（中略）」という形が明治期を通じて最も広くかつ多く用いられていた形である。（中略）ハンケチという形はむしろハンケチーフの省略形として生まれたものと考えべきなのであって、ハンカチーフ→ハンカチ→ハンケチというよりはハンカチーフ→ハンカチとハンケチーフ→ハンケチという別々の過程を考えた方が自然なのではあるまいか」と述べている。「ハンケチーフ」が明治期において既に存在したため、「ハンケチ」は「ハンケチーフ」が略された結果であることが考えられる。

「ブランケット→ケットー」について、他の辞書の記載を見ると、「ブランケット」が「ケット」に略されることが普通であることが分かる。「ケットー」はおそらく「ケット」という略語に長音をつけて造られたものである。漢語の中で、4 μ 構成の語は多く存在する。3 μ の「ケット」を4 μ にするのは音韻上の安定を図るものであると考えられる。

同じように、「キューピット→キューピー」の「キューピー」は「キューピ」を構成する音節「キユ」と「ピ」にそれぞれ長音をつけて造られたものであり、「キューピット→キューピー」の「キューピー」は「キューピ」に長音をつけて造られたものであると考えられる。

「ケット」が「ケットー」に、「キューピ」が「キューピー」に、「キューピ」が「キューピー」になることから、4 μ の音韻構成の安定性が窺える。

「ハズバンド→ハス」の「ハズバンド」は発音のゆれが見られる。『外来語辞典』は「ハズバンド (Husband) [英] 正しくは「ハズバンド」。夫。良人。」と書いている。『新しい言葉の字引 大増補改訂版』の中でも、「ハズ 「ハズバンド」の略。「ハス」とも。」の記載が見られる。つまり、＜英語 husband＞は「ハズバンド」あるいは「ハズバンド」に発音されることがある。辞書は「ハズバンド」が「ハス」に略されることを記載するのも発音のゆれがあるからである。

他にも、発音のゆれが見られる語例がある。「ダイアグラム→ダイヤ」の「ダイアグラム」＜英語 diagram＞は『現代日用新語辞典』の中で「だいやぐらむ [Diagram 英]」、『最新現代用語辞典』の中で「ダイヤグラム (英) Diagram」と記載される。「ダイヤモンド→ダイヤ」の「ダイヤモンド」＜英語 diamond＞は『現代新語辞典』の中で「ダイヤ (Diamond) ダイヤモンドの略」、『最新現代用語辞典』の中で「ダイヤモンド (英) Diamond」と表記されている。

「ゴシック→ゴチ」の「ゴシック」＜英語 gothic＞について、文化之日本社編『現代語解説 上巻』（文化之日本社、1925）は「ゴチツクとも発音する」と書いており、『日本国語大辞典 第二版』（小学館、2000～2002）も「ゴシック（中略）（ゴジック）「ゴチック」に同じ」の記載がある。

「グリセリン→リスリン」の「グリセリン」について、『日本国語大辞典 第二版』は「グリセリン [名]（ドイツ Glycerin 英 glycerine）（グリスリン・グリセロール）三価アルコールの一つ」と説

明している。ということで、「グリセリン」は「グリスリン」とも発音されると考えられる。略語形「リスリン」の原語は「グリスリン」であると考ええる。

以上のように、外来語の表記のゆれあるいは発音のゆれは一部の不規則変化の略語が存在する原因であろうと考える。

「メッセル→メス」、「メツサー→メス」の中の「メッセル」、「メツサー」と「メス」はいずれも小刀、解剖刀の意味であるが、由来する外国語が異なる。「メッセル」及び「メツサー」は<ドイツ語messer>から由来するものであり、表記法が違うため、表記のゆれが生じた。『日用舶来語便覧』は「メッセル…小刀Messer（獨）小刀のことにて、略してメスと云ひ、又ミッセルとも云ふ。〔メツサー〕（英）」という記載があるが、英語語彙の中で、<独語messer>に対応するのは<英語scalpel>あるいは<英語knife>である。吉沢典男・石綿敏雄編『外来語の語源』（角川書店、1979）は「メス【オランダ語mes】（中略）語源←独Messer（中略）参考 英語ではsurgical knifeまたはscalpel（外科用ナイフ）」というように説明している。そのため、「〔メツサー〕（英）」の記述はおそらく間違いであろう。一方、「メス」は<蘭語mes>から由来するものである。『日本国語大辞典 第二版』も「メス【名】（オランダmes）西洋風の小刀」と書いてある。つまり、「メス」は「メッセル」や「メツサー」が略されて形成したものではなく、オランダ語から入った外来語である。

最後に、「ローラー→ロール」の「ローラー」は<英語roller>から由来するものである。この語の略語化はおそらく「ローラー＝<英語roller>→<英語roll>＝ロール」であると推測できる。<英語roller>は接尾辞の<～er>が削除された。「ロール」は保留された<roll>を転写したものであると考えられる。

以上のように、不規則変化の語例を一つずつ説明した。これらの語例はやや特殊的で、その略語化が普通の規則で説明しがたい。そのため、普通の短縮によって形成した語例と不規則型の語例を区別して分析する必要がある。

4.3. 外国語の影響で形成した略語

収集した語例の中には、日本語で略語化されたというより、外国語そのままを転写したものもある。これらの語例の形成は日本語の略語造語法に影響されないと考える。

「メモ」は原語が日本語で略語化されたものではなく、<英語memo>を転写したものであると考えられる。『日用舶来語便覧』は「メモ(memo)」と書いてある。『新しい言葉の字引 大増補改版』も「メモ」という項目に「memo」と書いてある。そして、井上十吉著『井上英和大辞典』（至誠堂書店、1919）にも、「memo（…筆者中略…）memorandumの略」という記載がある。

「アド」は<英語Ad.>に対応している。『井上英和大辞典』の「ad., advertisementの略」という記載によって、当時の英語において、<advertisement>は既に<ad.>に略されていたことが

わかる。『外来語辞典』は「アド (Ad.)」と書いてある。『新しい言葉の字引 大増補改版』も「アド Ad. 英語 (えいご) の Advertisement, Advertising を略して、アメリカで用ひられるもの」と書いてある。

「インスタ」は<英語 inst>を転写したものである。『秘密辞典』は「いんすと 英 Inst Instant の略。今月。」と書いてあり、『井上英和大辞典』も「instant (中略) 今月の, 本月の, 此月の, (inst. と略す)」の記載がある。

「ファン」は<英語 fan>から由来するものである。<fan>は<英語 fanatic>の略語である。『ランダムハウス英和大辞典 第二版』(小学館、1994)は「fan n. ((話)) (チーム・俳優・スポーツ・趣味などの) 熱狂的な支持者。熱心的な愛好者。ファン (中略) [1862.米; FANATICの短縮形]」というように説明している。

「ジャップ」(あるいは「ジヤツプ」)は<英語 Jap>を転写したものである。『新しい言葉の字引 大増補改版』は「ジャップ Jap (英) Japan, Japanese の略」、『英語から生れた新しい現代語辞典』は「ジヤツプ (Jap) (Japanese) の略」と説明している。そもそも、「ジャップ」という語は欧米人が日本人に対する嘲笑的な呼び方である。そのため、「<英語 Japanese>→<英語 Jap>」が先にあり、「ジャップ」が<Jap>から由来することが分かりやすい。

「パス」は<英語 pass>を転写したものである。<英語 pass>について、『井上英和大辞典』は「pass (中略) ㊦切符, 通行許可證, 通行券, 通券, 入場券 (中略)。㊧ (又 free pass) 無料乗車券, 無料旅行券, 旅行免状」のように解釈している。

5. 単語型略語の形成について—短縮語を中心に—

第4節の分析を踏まえ、明治・大正期における単語型略語の形成について分析する(本節から第7節まで)。分析は短縮によって形成した語例を中心に行い、第4.2節の不規則型の語例と第4.3節の外国語の影響で形成した語例を分析対象から外すことにする。

単語型略語の形成を明らかにするために、二つの問題を考える必要がある。これからの分析はこの二つの問題点を中心に論じたいと考える。

- (1) a. **類型の問題**: 略語形として、原語のどの部分を保留するかは重要である。この選択で、略語の類型が決められる。
- b. **長さの問題**: aについて決めた後、単語型外来語をどのように二分するかということによって略語の長さ(音節数、モーラ数)が決められ、略語が最終的に生成する。

6. 類型の問題について

表1に収録される語例の中で、前部保留型の語例数は圧倒的に多い。原語の前部を保留して略語形を造るのが主流であることが言うまでもない。

それに対し、後部保留型はわずか7例（異なり語数）がある。語例は「フランネル」、「ブランケット」（「ブランケット」）、「コスメチック」（「コスメチック」）、「ワニス」、「アルミニウム」（「アルミニウム」）、「タイプスト」、「コンミッション」がある。特殊の語例「モルヒネ」もある。ただし、このような語例は1例しか発見していない。

前部保留型の略語形成に音韻的規則は大きな影響を与えていると考えられている。それに対し、後部保留型や特殊語例「モルヒネ」などの略語の形成について、語彙的視点での分析が必要であると考える。その形成原因として、隠語を造ることや同音衝突を避けることなどが考えられる。いくつかの具体例を挙げて説明する。

6.1. 「タイプスト」と「コンミッション」の形成について

略語「タイプスト」と「コンミッション」は隠語の性質を持っていると考えられる。二つの語例は『新しい言葉の字引 大増補版』に収録されている。ここで、同辞書の解釈を引用する。

・ピスト タイピスト（其項参照）を略して、軽んじて呼ぶ名。唾棄すべし。但し若い会社員などが好んで用ひる。

・ミッション コンミッション（其項参照）の略。露骨に聞えないやうに略していふ。

隠語を作るため、人々は普通の略語造語法を使わず、後部のモーラを取って後部保留型略語を作ったことを考えやすい。榎垣実編『隠語辞典』（東京堂、1956）の巻末の隠語概説に「隠語として効果からいえば、下部を略すより上部を略す方がすぐれている。ただ一音を省略しただけで、ほとんど元の形が想像できなくなってしまう場合が多い」という論述がある。

6.2. 「フランネル」と「ブランケット」の形成について

「フランネル」と「ブランケット」は後部保留型の略語である。『日用舶来語便覧』によると、フランネルは「紡毛糸を以て織りたる一種の毛織物」であり、ブランケットは「毛布。毛氈。」の意を持っている。つまり、「フランネル」と「ブランケット」はいずれも毛織物の一種である。

ここで、富田仁『舶来事物起原事典』（名著普及会、1987）の記述の一部を引用する。

- (2) フランネルという毛織物は幕末以来、ラシャ（羅紗）とともに輸入されて、(中略) 明治9年（中略）東京・千住に製絨所が設立された。これが日本最初の毛織物工場であった。(中略) 明治13年、銀座に特約販売店をつくり、そこでラシャとともにフランネルを販売した。
- (3) 赤ゲットという、(中略) 明治初年に輸入された毛織物の一つであるブランケットの色にちなむことばである。(中略) 慶応4年（1868）5月、板垣退助の今市駅戦争分捕品目録報告中に「ブランケット」4枚とあり、翌明治2年5月刊行の『舞台穿』にも「ケット、浅尾奥山、羽をりにも成、敷物にも成、ふとんにも成、戦場にては無ければならぬ、これが三枚目じゃ、何まいも買たり買たり」と記されている。(中略) 『武江年表』には近頃出てきたものとして「西洋呉服店フ

ランケット」があげられているが、明治6年の貿易輸入額として「フランケット四十一万四千元」という巨額の金額が記されている。

(2)はフランネルについての記述、(3)はブランケットについての記述である。フランネルは幕末に日本に輸入されたが、ブランケットは明治初期に日本に輸入された。輸入時期から見ると、両者は大きな違いがない。そして、(3)を見ると、<英語blanket>は「フランケット」にも表記されていたことが分かる。ということで、外来語「フランネル」と「ブランケット」が前部のモーラを取って前部保留型に略されるのであれば、「フランネル」は「フラン」に略され、「ブランケット」も「フラン」に略されてしまう（「当時「フランケット」にも表記されていたため）。二つの外来語がほぼ同じ時期に使用され、いずれも毛織物の意を持つため、同音衝突が起こってしまうのであろう。以上の理由で、前部保留型ではなく、後部保留型の「フランネル」と「フランケット」が造られたと考えられる。

6.3. 「コスメチック」の形成について

「コスメチック」<英語cosmetic>は後部保留型の「コスメチック」だけではなく、前部保留型の「コスメチック」にも略されている。

明治・大正期の辞書の英和辞書（あるいは和英辞書）の中で、高橋新吉等編『和訳英辞書』（American Presbyterian Mission Press, 1869）は「Cosmetic（中略）化粧ニ用ユル物。白粉ノ類」、『英和対訳袖珍辞書』（蔵田屋清右衛門、1869）は「化粧ニ用ユル白粉類」、柴田昌吉・子安峻編『英和字彙』（日就社、1873）は「Cosmetic（中略）白粉、脂粉」、箱田保顕纂訳『大全英和辞書』（誠之堂他、1885）も同じく「化粧ニ用ユル物。白粉ノ類」と説明している。大正期の辞書『井上英和大辞典』は「化粧品（脂粉・美顔水等）、コスメチック、脂粉」と説明している。

それに対し、日本語辞書の中で、金沢庄三郎編『辞林』（三省堂、1907）は「コスメチック [Cosmetic]（名）脂肪を原料とし香料を加へて製造したる化粧品、頭髮又は口髭などに塗（ヌ）るに用ふるもの」、生田長江編『文学新語小辞典』（新潮社、1913）は「コスメチック 化粧用の脂で棒の状に固まつてゐて、香りが高い。髪、髯等に用ふ」、郁文舎編『辞海』（郁文舎、1914）は「コスメチック [Cosmetic] 名 脂肪を原料とし香料を加へて製したる化粧品。頭髮又は口髭などに塗るに用ふる」、上田万年・松井簡治著『大日本国語辞典』（金港堂書籍、1916）は「こすめちつく（英 Cosmetic）（名）頭髮・髭などに塗る化粧品。脂肪を原料とし、香料を加へて製す」と説明している。

以上の辞書の解釈を見れば、<英語cosmetic>は化粧品を意味するが、<日本語コスメチック>は特に髪や髭などに塗る化粧品を指している、という意味上の違いが窺える。『日本国語大辞典第二版』も「コスメチック」について「男性用化粧品の一つ。脂肪に香料を加えて棒状に固めたもの。頭髮や口髭などの形を整えるために用いる。チック」と「口紅、整髪料などの化粧品一般をいう」、二つの意味を持っているように説明している。

そのため、「コスメ_{チツク}」と「_{コスメ}チック」はそれぞれ異なる意味側面を指していると考えられる。「コスメ_{チツク}」は主に「化粧品一般」を意味し、「_{コスメ}チック」は「頭髪や口髭などの形を整えるもの」を意味すると考えられる。これは後部保留型「_{コスメ}チック」の形成する原因であると考えられる。

以上の分析を踏まえ、以下の結論が導かれる。

結論（ア）：明治・大正期において、単語型の外来語は前部保留型に略される傾向が非常に強い。単語型略語の中で、前部保留型は無標であり、後部保留型は有標である。後部保留型などの語例は語彙的原因で形成したと考える。

7. 長さの問題

単語型外来語の中で、語構成上にさらに分けられない単純語の語例がある一方、接辞がついており、「接頭辞#語基」や「語基#接尾辞」の構造を持っているように見える語例も存在することが明白である。そのため、二種類の語例を分けて論じると考える。

7.1. 接辞を持たない単語型外来語の略語化

7.1. 1. 主流形式である2σ構成の略語

接辞を持たない単語型外来語は語構成上に更に分けることができないものと見なしてよからう。このような外来語の分節は音韻上の分節である。この類の略語を音節数、モーラ数によって、表2のように分類できる。

表2 語例の音節数、モーラ数

【1σ、2μ】（1例）	チャン _{ピオン}
【2σ、2μ】（15例）	サル _{ヴァルサル} 、セルジ（セル _ヂ ）、モスリン、ハスバンド（ハズ _{バンド} ）、ポリス、エステ _{ーブ} （エス _{てーブ} ）、エボナイト、ブルジョア（ブル _{ジョア} ）、ベロリン、コジ _{ック} 、トロ _{ッコ} 、ミス _{テーク} 、ワニス、フランネル、モルヒネ
【2σ、3μ】（12例）	セメン _{シイナ} （セメン _{シーナ} ）、セメント、ブラン _{テイ} （ブラン _{デー} ）、ダイヤ _{モンド} 、レザー _{レット} 、パンク _{チュア} 、ダイヤ _{グラム} 、マントリー、マントル、コンパ _{ニー} 、ランド _{セル} 、ブラン _{ケット} 、
【2σ、4μ】（2例）	コンキユウ _{バイン} 、コンミツ _{ション}
【3σ、3μ】（4例）	バラスト、エレキ _{テル} 、ロガリ _{ズム} 、フラス _コ
【3σ、4μ】（3例）	コンクリ _{ート} 、コールタ _{ール} 、ハンカチ _{ーフ}
【4σ、4μ】（1例）	アスパラ _{ガス}

略語は2μ～4μ あるいは1σ～4σで構成されている。そして、2σ構成の語例は最も多く、29例がある。語例数から見ると、接辞を持たない外来語の略語化において、原語の2σを取って略語形を造るのは主流であると言えよう。

具体的に見ると、2σ構成略語に、【2σ、2μ】の略語、【2σ、3μ】の略語、【2σ、4μ】

の略語がある。モーラ数が異なる原因として、特殊拍の存在が挙げられる。日本語のモーラについて窪田晴夫『語形成と音韻構造』（くろしお、1995）は以下のように述べている。

(4) 長音や撥音（ん）、促音（っ）、二重母音の第2要素（ai,au）という、いわゆる「特殊拍」（また「モーラ音素」と呼ばれる要素が、モーラとしては独立していても音節レベルでは独立していないために、モーラ（ μ ）と音節（ σ ）の二重構造が必要となってくる。つまり、モーラの中に、自立性の低い「特殊拍」と、自立性の高い「自立拍」—通常のCVモーラーの2種類があるために、モーラ構造と音節構造のずれが生じるのである。

【2 σ 、2 μ 】に属する「セル_シ」（「セル_チ」）や「_ラランネル」などの略語は特殊拍を含んでいないことが明白である。それに対し、【2 σ 、3 μ 】の略語の中で、「セメント」、「ブラン_ティ」、「パンク_チェ」、「マントリ_ー」、「マントル」、「セメン_シィナ」は撥音、「ダイヤ_モンド」と「ダイヤ_{グラ}ム」は二重母音、「レザ_レット」は長音、「_ラランケット」は促音を持っている。【2 σ 、4 μ 】略語の中で、「コンキウ_バィン」は撥音と二重母音、「コンミ_ション」は促音と撥音を持っている。そして、語例の中で、音節を分解させることも見られない。以上のことで、以下の結論が導かれる。

結論（イ）：接辞を持たない単純語の外来語が略される際に、原語の2 σ を取って単語型略語を作るのが主流である。そして、略語化の基本単位は音節である。

7.1. 2. 1 σ 構成の略語

1 σ 構成の語例は「チャン_ピオン」のみである。原語「チャンピオン」＜英語 champion＞は「チャン」と「ピオン」、2 σ からなっている（「チャン」は撥音の特殊拍、「ピオン」は二重母音と撥音の特殊拍を持つ）。結論（イ）で述べたが、明治・大正期の外来語略語化の基本単位は音節であると推測される。そのため、「チャンピオン」の略語形として、前の「チャン」を取るか、後の「ピオン」を取るかは主な問題である。

そして、結論（ア）を見ればわかるように、この時期において、前の部分を取って略語を造るのは主流である。ということで、外来語「チャンピオン」は「チャン」に略されることが考えられやすい。

ちなみに、語例収集を行う限り、1 σ 構成の略語は「チャン_ピオン」しか見つからなく、生産力がかなり低いと考える。

7.1. 3. 3 σ 以上構成の略語

3 σ 以上の略語の中で、【3 σ 、3 μ 】の類、【3 σ 、4 μ 】の類と【4 σ 、4 μ 】の類がある。(一)、【3 σ 、3 μ 】の語例について。

「バラスト」について、『外来語の語源』は「バラスト【英 ballast】（中略）語源 現在、英国からソ連にかけてヨーロッパ北部の海運国で使われており、英語には後期ドイツ語から入ったと考えら

れるが、古スウェーデン語、あるいは古オランダ語のballast、barlast <bar (裸の) + last (荷物)>から入ったとも考えられ、軽荷、底荷、船脚荷、艙底荷などに訳されていると述べている。明治期の英和辞書を調べて、1869年の『英和对訳袖珍辞書』は<英語ballast>について「軽荷」、<英語last>について「last s. 重荷」のように説明している。1872年の『英和对訳辞書』は<英語ballast>について「軽荷、船ニ積ム沙石」、<英語last>について「重荷。沓ヲ作ル形」と説明している。つまり、当時の英語辞書から見れば、「バラスト」は<bal + last>という語構成を持っていると認識されていたのであろう。略語「バラスト」は前部の「bal」と後部の「last」が結合した結果であると考えられる。

「ロガリズム」について、『外来語の語源』は「ロガリズム【英logarithm】『数学』対数(中略)語源 ←近ラテンlogarithmus<ギリシアlógos(割合、言葉) + arithmós [数] <légein [☆レゲイン](話す)。スコットランドの数学者J.Napierが1614年に作った語」と述べている。<英語logarithm>は<log + arithm>のように構成されていると考える。英語の中で、<arithmetic>という語の存在は確認できる。1869年の『英和对訳袖珍辞書』では「Arithmetic s. 算術」、1872年の『英和对訳辞書』では「Arithmetic.s. 算術」が見られる。「ロガリズム」は対数に訳されているが、「数」の意味を表すのは<arithm>の部分であろう。ということによって、「ロガリズム」は(ローマ字表記で言うと)「log + arizumu」の構成を持っていると考えられる。

「エレキテル」が「エレ」ではな「エレキ」に略されるのは漢字表記の影響があったかもしれない。<蘭語elektricitet>の訳語として、『紅毛雑話』(国書刊行会編『文明源流叢書』(国書刊行会、1914)による)の「野禮幾的爾」、橋本宗吉著『阿蘭陀始制エレキテル究理原』(三崎省三、1925)の「越禮紀低児」と「天気器エレキテル」、『厚生新編 卷37』の「野列吉的児」などがあるが、「エレキ」の当て字として「越歴」というものがある。1856年の川本裕幸民譯『氣海觀瀾廣義 卷十一』は「越エ歴レキ的テリリ失シ帝テイ多ト。従来越歴的児と稱スル者ナリ。今此篇略シテ越歴トナレ」というように書いてある。1871年の中神保抄訳『電気論』には「越歴久登里止低」、1873年の瓜生政和編『西哲叢談』(瓜生政和、1873)には「越歴篤児」が見られる。ということによって、「エレキテル→エレキ」というより、「越歴的児→越歴」や「越歴篤児→越歴」と考えたほうがよいのではないかと思う。<蘭語elektricitet>の漢字表記は2字漢語に略された結果、「エレキ」という3σの略語が形成した。

飛田良文・惣郷正明編『明治のことは辞典』(東京堂、1986)によると、「フラスコ」<葡語frasco>の訳語に「仏狼壺」、「硝子壺」、「仏狼壺」などがある。その中で、同辞典によると、「仏狼壺」という訳語は慶応3年の『和英語林集成』と明治10年の『和独対訳字林』にある。<葡語frasco>は早い時期に「仏狼壺」に訳されたことがわかる。壺は「こ」で発音される(『日本国語大辞典 第二版』の「壺」の項目を参照)ため、「フラスコ」は「フラス」が「仏狼」、「コ」は「壺」に対応することが考えられる。つまり、漢字表記の影響で、「フラスコ」は「フラス+コ」のよう

な構成を持つと認識されていた可能性が高い。そのために「フラス」が略語形になったと考える。

(二)、【3σ、4μ】の略語について

「コンクリート」の形成も漢字表記の影響であると考えられる。明治・大正期において、＜英語 concrete＞を「コンクリート」に訳すこと以外、漢語表記も存在している。「地質調査所年報 明治17年報第壹號」（農商務省地質調査所、1884）に「混（コン）凝（クリ）土（ト）」、クラーク著『欧米築路法』（勤行堂、1888）及びの臨時横浜築港局編『横浜築港誌』（中野健明、1896）に訓なしの「混凝土」、竹貫直次著『応用地木工学』（博文館、1898）に「混（コン）凝（クリ）土（ト）」、広井勇著『築港 巻の一』（工学書院、1901）に「混（コン）凝（クリ）土（ト）」、久野末五郎著『実地土木工学』（博文館、1904）に「混（コン）凝（クリ）土（ト）」がある。漢語として、混凝土は複合語構成を持っており、「混凝+土」に分節されることが考えやすい。混は「こん」で、凝は「くり」で発音される（『日本国語大辞典 第二版』を参照）ため、略語「コンクリート」は漢字略語「混凝+土」の「混凝」（こんくりと発音される）から由来するものであると考えられる。

「コールタール」について、明治・大正期に出版された一部の辞書が載せているこの語に対する説明をいくつか引用する。

- ・コール・タール [Coal-tar] (名) 石炭を蒸焼にする際に生ずる半流動の物質、幾多の化合物を含有し、「アニリン」又は石炭酸等を製する原料に供せられ、又、「ブリキ」又は鐵材等に塗りに腐蝕を防ぐ料に供せらる。

金沢庄三郎編『辞林』

- ・コールタール [Coal-tar] 名 石炭瓦斯及コークス製造の副生物として得らるべき黒色濃稠の液。特種の臭氣あり。アニリン又は石炭酸の原料となり又ブリキ及鐵材の防腐料に供せらる。

郁文舎編『辞海』

- ・コール・ター (Coal-tar) [英] 石炭の乾溜により生ずる黒き不透明の液體。鐵器錆止塗料に供せらる。

勝屋英造編『外来語辞典』

- ・こーる・たー (英 Coal-tar) (名) 石炭瓦斯製造の際、瓦斯液と共に溜出する黒色・悪臭ある粘性物。ペンキとして、おりき・木材等に塗る (後略…)

上田万年、松井簡治著『大日本国語辞典 第2巻く〜し』

『辞林』、『外来語辞典』及び『大日本国語辞典』はいずれも「コール+タール」の分節を行ったが、『辞海』は「コールタール」のように分けている。しかし、＜英語 coal-tar＞の語構成を見ると、「コール+タール」のほうが適切であろう。ということで、当時、「コールタール」が「コール+タール」の構成を持つと認識されたことがほぼ確定できる。

「ハンカチーフ」は「ハン+カチーフ」と見なして良からう。既に述べたが、池上（1970）は明治期における＜英語 handkerchief＞の日本語表記のゆれを調査した。同論文によると、＜handkerchief＞は「手巾」や「手拭」などの訳語がある。＜英語 hand＞は「手」に訳されたと考える。つまり、＜handkerchief＞は＜hand + kerchief＞の構成を持つと認識されていたであろう。略語「ハンカチーフ」は「ハン」と「カチ」が結合した結果である。

(三)、【4σ、4μ】の略語について

【4 σ 、4 μ 】の音韻構造を持つ語例は「アスパラガス」しかない。この略語の形成原因はまだ不明である。しかし、おそらく「アスパラガス」は複合語の語構成を持つように認識されていたのではないかと考える。窪蘭（2010）は5 μ 以上の長さを持つ外来語が形態的に単純語であっても音韻的に複合語であると述べている。外来語「アスパラガス」は6 μ の長さを持つため、複合語的な語構成を持つと認識されていた可能性はある。

以上のように、第7.1.2節と第7.1.3節の(一)(三)で、1 σ の略語と3 σ 以上の略語の形成について分析、推測を行った。特に3 σ 以上の略語について、これらの原語は当時の人々の言語意識の中で二つの部分に分割することができる構成を持っていると認識されていたと考える。このような構成は「ガイド・ブック」や「モーニング・コート」のような複合語構成と異なることが明らかであろう。そのため、この類の外来語を「言語意識上の複合語」と呼ぶことにする。従って、以下のような結論がある。

結論（ウ）：人々の言語意識の中で、二分することができる構成を持つ「言語意識上の複合語」は存在する。この類に属する外来語は3 σ 以上の長さに略されることが普通である。

7.2. 接辞を持つ単語型略語の略語化

「ミリメートル」、「キログラム」、「プロステテュート」（「プロスチュート」、「プロステチュート」）、「プログラム」、「プロレタリアート」（「プロレタリア」）、「エキストラクト」（「エックストラクタム」）、「インバネス」（「インヴァネス」）、「カリウム」、「アルミニウム」（「アルミニウム」）、「ビルディング」、「コスメチック」、「タイピスト」、「エンゲージメント」、「ミスター」、「ピッチャー」、「コレスボンデンス」はその原語が接辞を持っていると考える。

「ミリメートル」<英語milli # metre、仏語milli # mètre>は千分の一を意味する接頭辞「ミリ」(milli～)を持っている。そのため、人々は自然にこの外来語を「ミリ（接辞）#メートル（語基）」のように認識する。結論（ア）が述べているように、明治・大正期において前部保留型の省略パターンは無標である。「ミリメートル」もそれに従い、前部の「ミリ」は略語形になった。

「キログラム」<英語kilo # gram>も「ミリメートル」とよく似ている。「キロ」(kilo～)は千倍の意味を表す接頭辞である。前部にある「キロ」は略語形になると考えやすい。

「プロステテュート」<英語pro # stitute>、「プロレタリアート」<英語pro # letariat>、「プログラム」<英語pro # gram>はいずれも「プロ」<pro～>という接頭辞を持っている。そのため、これらの語は「プロ」に略される。

「エキストラクト」<ex # tract>は接頭辞<ex～>を持っている。そのため、この語は前部にある接頭辞の部分を保留し、「エキス」に略される。

「インバネス」<英語inver # ness>は「ネス」<～ness>という接尾辞を持っているため、「インバ」が略語形になる。

「カリウム」<独語kal # ium>は「イウム」<～ium>という接尾辞を持っている。略語化され

る際に、接辞の<ium>にあたる部分が省略され、語基<kal>にあたる「カリ」が保留され、略語形になる。「アルミニウム」も同じく<~ium>の接辞を持っている。略語化される際に、この語は「アルミ#ニウム」に分節される。「アルミ」は語基の部分にあたり、「ニウム」は接辞の部分にあたる。「アルミニウム」は「アルミ」と「ニウム」という二つの略語形がある。

「ビルディング」<英語 build # ing>は<~ing>という接尾辞を持っている。略語化される際に、<~ing>にあたる部分が省略される。ということで、前部の2 μ である「ビル」が略語形になる。

「シスター」は<英語 sist # er>に対応している。略語化される際に、<~er>にあたる部分が省略され、語基< sist >から取った2 σ は略語形になる。

「コスメチック」は「チック」<~tic>の接尾辞を持つため、「コスメ#チック」のように分節され、その略語形は「コスメ」と「チック」二つがある。前で述べたが、二つの略語はそれぞれ「コスメチック」の異なる意味側面を指すと考える。

「タイピスト」は<~ist>という接尾辞を持つため、「タイ#ピスト」に分節される。隠語の性質を持たせるため、人々は取って後部の「ピスト」を取って略語形を造る。

その他、「エンゲージメント」<英語 engage # ment>、「ピッチャー」<英語 pitch # er>はいずれも接尾辞にあたる部分が省略され、語基が略語形になる。

もちろん、接辞を持つすべての外来語は「接頭辞#語基」あるいは「語基#接尾辞」のように認識されるとは限らない。例えば、「コレスポネンス」<英語 correspondence>は接尾辞を持っているが、その略語化は接辞の存在に影響されない。その原因について、語形が長いこと（他の外来語は5 μ 以下の長さに対し、「コレスポネンス」は8 μ の長さを持つ）と接辞がよく認識されていないことは考えられる。この語が「コレス」に略される原因はおそらく「コレス+ポネンス」のような構成を持つと認識されていたと推測する。

以上の考察より、接辞を持っているかどうかによって、単語型外来語の略語化はかなり変わることがわかった。そして、以下の結論がある。

結論（エ）：接辞を持つ単語型外来語はその略語化において、語構成的に「接頭辞#語基」あるいは「語基#接尾辞」のように分節されることがある。このような分節は略語化に影響を与える。

8. まとめ

ここまでの考察で導かれたのは四つの結論がある。

結論（ア）：明治・大正期において、単語型の外来語は前部保留型に略される傾向が非常に強い。単語型略語の中で、前部保留型は無標であり、後部保留型は有標である。後部保留型などの語例は語彙的原因で形成したと考える。

結論（イ）：接辞を持たない単純語の外来語が略される際に、原語の2 σ を取って単語型略語を作るのが主流である。そして、略語化の基本単位は音節である。

結論（ウ）：人々の言語意識の中で、二分することができる構成を持つ「言語意識上の複合語」は存在する。この類に属する外来語は3σ以上の長さに略されることが普通である。

結論（エ）：接辞を持つ単語型外来語はその略語化において、語構成的に「接頭辞#語基」あるいは「語基#接尾辞」のように分節されることがある。このような分節は略語化に影響を与える。

ある語彙を省略する際に、前の部分を残し、それを略語形にすることは最も普通であろう。これは人間が前の部分で元々の語形を思い出しやすいからであると考えられている。つまり、結論（ア）はやはり人間の言語意識と深い関連を持っていると考える。

日本語の語彙の中で、2σ～4σの語は主流である。特に和語は2σを持つことが多い。それに対し、今回調査で収集した外来語は4σ以上を持つことが普通である。外来語を日本語の音韻構造に当てはめるのは外来語略語が絶えずに略される大きな原因であろう。そのため、結論（イ）が述べている「2σ略語は主流である」ことが理解できよう。

一方、外国語の語構成や漢字表記の存在などの原因によって、単語型外来語は「前部+後部」のように認識される場合もある。3σの略語が造られるのは結論（ウ）が述べるように人間の言語意識と関連があるのであろう。

接辞を持たない単語型外来語は語構成上に更に分けられない単純語であり、音韻で分節するしかない。接辞を持つ単語型外来語は派生語になっており、その中の一部は略語化において語構成で分節されることがある。つまり、結論（エ）では単語型外来語の中でも合成語の語構成を持つ語例が存在することを述べた。

以上のことを踏まえ、明治・大正期における単語型略語の形成を図で表すと、以下のようである。

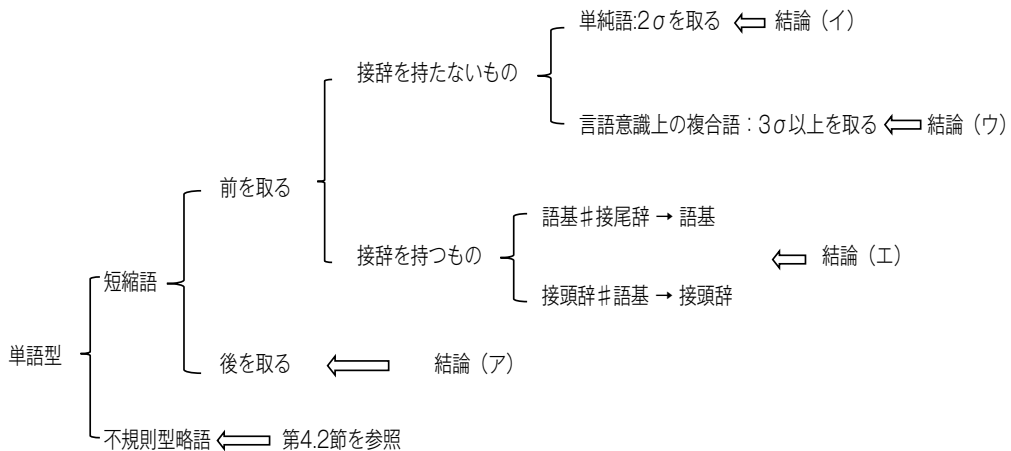


図 明治・大正期における単語型略語の形成

<参考文献>

論文

池上秋彦 (1970) 「明治期における外国語の輸入について - 特に handkerchief と ink の場合 -」『文芸研究』24、明治大学文芸研究会

田辺洋二 (1988) 「外来語の略語—カタカナ語とローマ字語—」『日本語学』7-7、明治書院

曾根博義 (1994) 「外来語辞典・文芸用語辞典解題」『近代用語の辞典集成 別巻』(大空社、1994) による

窪蘭晴夫 (2010) 「語形性と音韻構造—短縮語のメカニズム—」『国語研プロジェクトレビュー』No. 3、国立国語研究所

太田聡 (2014) 「短縮語形成管見」『異文化研究』8、山口大学人文学部異文化交流研究施設

Itô, Junko (1990) "Prosodic minimality in Japanese." *CLS 26- II : Papers from the parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*, pp.231-239

書籍

榎垣実 (1963) 『日本外来語の研究』研究社

石綿敏雄 (2005) 『外来語の総合的研究』東京堂

